

縄文時代草創期の遺跡の立地について

秋山 圭子

はじめに

縄文時代に開始した定住生活が、それまでのネガティブな社会からの脱却を成功させた第一の要因であるとする西田の指摘は、定住革命として大々的に提唱された(西田1981)。そしてさらに日本において定住化が著しく進んだのは縄文時代早期であり(原田1983・84、戸田1983)、本格的に定住が定着したのは前期に入ってからであるという見方が提示される(西田1980・前掲、小林1983、岡村1987他)。この定住の指標としては、いくつかの論考においても指摘されるように(西田1980・前掲、小林1983、岡村1987、A. テスター1995他)、ある集落において、季節性の資源を複数の季節にわたって獲得していることがあげられている。また、在地の地域生態の変化に応じた適応戦略の保持(安斎1994)、住居状遺構の出現(桜井1992)、住環境にける労働時間の長さ(小林1986、渡辺1966)などもその指標としてあげられている。

さらに、定住とはいえ全く移動しない例はほとんどない(Susan Kent1989)ことや、縄文時代における「定住」が、一年のうちに拠点が数回移動する(羽生1990)いわば領域内回帰であるといった指摘は近年多くみられる。縄文時代の定住化研究においてもこの認識は、浸透しているといっていだろう。

こうしたなか縄文時代草創期は、日本における定住化の画期として認識された。しかし該期の定住の過程は、遺構発見数の少なさやその多様性もあって遺跡あるいは遺構ごとの単独の研究ばかりが目立ったのが実状だった。最近になって、内水面漁労や堅果類利用の活発化が定住性を高め(佐藤1992、雨宮1993)、遺跡内部の場の分化と数遺跡にまたがる集団の場の分化がおこった(桜井前掲、望月1993)ことなどが指摘されるようになった。

しかしここまで、居住地選択の条件、つまり立地についての分析がほとんどなされていない。定住という現象において、草創期の集団がその領域内のどこにどんな遺跡を形成したか。近年、当時彼らが選び設定したであろう住環境について、広い地域での比較分析が可能になってきている。そこで本論では、集団の領域における遺跡の配置を立地という観点から分析し、草創期における定住化の過程の解明を試みたい。

1. 草創期における領域研究と課題

縄文時代の領域研究の中で、清水はいくつかの「地縁集団」(水野1969)の集合が社会規制のもとで使用した共通の生産地域を「集団領域」と表現した(清水1973)。西本はその領域について、居住地は様々な生業活動の結節点であり、生業圏の中心である必要はないと指摘する(西本1985)。また小林は、遺跡あるいは当時の生活様式の多様性をふまえ、遺跡の居住期間に注目して立地・遺物・遺構から6つのパターンに分類している(小林1973)。そしてそのパターンの組み合わせ(領域や遺跡群)をセトルメントシステムとして認識した。これは遺跡の空間配置とその遺跡同士の関連性から、領域のあり方の規則を分析する手法をとっている。

草創期の領域研究は、まず山内清男と佐藤達夫が神子柴遺跡の性格をデポと指摘し、遺跡間の関係を考察している(山内・佐藤1962)。彼らはこの遺跡を「石器製作地と消費地の間に介在」(山内1969)する「社会的余剰」(佐藤達1974)の表象として位置づけた。また栗島はその機能の多様性(集積と埋納)を指摘し、デポを「領域内の回帰地点」と位置づけた(栗島1990)。一方、田中は長野県仲町遺跡を遺物分布から墓と認定し、領域内の「墓域」の存在と定住性の高さを指摘している(田中1992)。

さらに河川の規模と立地から、該期前半には遺跡は河川合流点の低位段丘に立地し内水面漁労の発達を読み取った研究（桜井1993・94）、鶴見川流域の遺跡の分布から、流域ごとの領域が展開されたと指摘する研究（坂本1986、1996他）、遺跡の立地において重層化を指摘した研究（村田・増子1978）などがみられる。また、東京都前田耕地遺跡の調査（町田ら1977・81・83）を端緒として、居住地と狩場の空間的配置の復元を可能とした慶応大学藤沢キャンパス内遺跡など（桜井他1992）大規模な面積の遺跡報告が増加し、その遺跡の全域を分析対象とした総合的な領域研究もなされるようになっていく。

以上、該期の集団領域についての先行研究をみると、いずれも石器製作技術、生業、遺跡立地において「分化」「重層化」を指摘する内容になっていることに気づく。この指摘は、白石によって、領域内の石材原産地・生業活動の場・集落がそれぞれ分化し、中間にデポを介在して経済的に集束する「集団構造」として理論化される（白石1994）。

こうした先行研究は、該期の特殊遺構のみの分析から社会全体を考察する矛盾、そして全国各地から「寄せ集めた」いくつかの遺跡の分析から具体的な領域や集団構造を捉えようとする矛盾を徐々に解決しつつあるように見える。しかし先に述べたとおり、定住化の重要な要素である立地についての分析が行われていない。そこで本論では、その遺跡の立地に着目して、該期の集団領域の中での場の配置を分析していく。

II. 分析の方法と手順

1. 対象地域と時期について

本論では多摩丘陵・相模野台地の草創期遺跡を対象に分析を進めたい。この地域は、近年の開発調査によって多くの該期遺跡、特に大規模発掘の遺跡がいくつも報告されており、遺跡内の場の配置分析がしやすい地域である。また、大きな河川の上流から下流までがその範囲内に含まれるため、定住や立地傾向と河川との関連性が、分析結果に反映されうるといこともこの地域を選んだ理由である。

また、対象時期についてだが、本研究では縄文時代草創期前半を対象とする。諏訪間編年（諏訪間1989）に照らし合わせると段階Ⅺおよび段階Ⅻに該当する時期、加えてそれにやや後続すると思われる花見山遺跡石器群までを取り扱うこととする。また、なすな原遺跡第2地区のB.C地点出土遺物は段階Ⅺであり、同L.M地区はそれ以降であると思われる。ここでは立地傾向の把握という目的上、細段階を設定せずに分析を試みたい。

2. 分類基準と分析方法

本論では、地域的な視点での遺跡の立地傾向分析をおこなっていく。

遺跡は、それぞれの出土遺物の組成によって分類する。まず出土遺物を大きく4グループに分け（表1）、遺跡ごとに各グループの出土量を算出する。そしてそれをもとに、遺跡を分類する（表2）。

こうした遺物組成による分類からは遺跡の機能がある程度推定されるであろうから、遺跡の機能と立地の

表1) 遺物のグループ

尖頭器類	尖頭器・有茎尖頭器・石鏃・細石刃
剥片類	剥片・碎片・未成品・石核
加工具類	石斧・搔器・削器・礪器・石錐・ピエスエスキュー・敲打器
土器	

表 2) 遺跡の分類

A		尖頭器類のみ（一点あるいは数点）出土する遺跡
B	1	尖頭器類 + 加工具類 出土する遺跡
	2	尖頭器類 + 剥片類 出土する遺跡
C	1	土器のみ 出土する遺跡
	2	土器 + 尖頭器類 出土する遺跡
	3	土器 + 尖頭器類 + 加工具類 出土する遺跡
	4	土器 + 加工具類 + 剥片類 出土する遺跡
D		4 類すべて 出土する遺跡
E		加工具類のみ 出土する遺跡

関連性の有無について検討できるだろう。また組成分類の際、遺物について割合での表示はしない。これは、出土割合による分類のみでは遺跡の規模（出土量）による分類が不可能となるためである。そこで出土遺物量とその組成を同時に示し、効果的に分類していくこととする。

ところで、石器の機能を安易に推測することの危険性は、多くの石器研究者によって指摘されている（阿子島1989、橋本1983ほか）。ここで加工具類とした一連の石器器種に関しては、むしろ上記 2 グループの機能には入らないもの、あるいは一つの機能に一概におさまらないと思われるもののグループであると表現した方がいいかもしれない。ここではその流動的な機能定義自体をグループの性格としたい。

III. 鶴見川流域の遺跡立地（表 3・図 1）

多摩丘陵の緩やかな斜面が長く続く地形の中を、鶴見川・多摩川・帷子川が流れている。鶴見川流域では計82の該期の遺跡が発見されている。主な支流は矢上川・早淵川・大熊川・谷本川・恩田川である。

I. 恩田川流域

㊤ げんじ山遺跡（図 2）

C 2 類。恩田川流域の標高60mの北向き斜面に立地する。微隆起線文土器 1 点、有茎尖頭器 2 点が出土している。

㊦ 宮ノ前遺跡（図 3）

D 類。横浜市緑区長津田町宮の前3325に所在する。谷に面する緩斜面に立地し、標高は51m、岩川との比高差は11mである。土器を 4 個体(30片)、尖頭器 1 点、有茎尖頭器 4 点、石鏃 2 点、ドリル 1 点を出土している。

㊧ 宮ノ前南遺跡（図 3）

D 類。横浜市緑区長津田町玄海田3758に所在する。標高51mの丘陵の斜面に立地し、岩川との比高差は11m。微隆起線文土器 1、爪形文土器 1、打製石斧 3、尖頭器 1、敲石、磨石、石核、わずかのフレーク、細石刃を出土するが、残念ながら、遺跡の平面分布図は、報告されていない。

㊨ なすな原遺跡（図 4）

D 類。町田市成瀬 1 号312-3他に所在する。恩田川とそこに流れ込む小川の合流点近くに、東西に 3 つ並んだ北向きに張り出した台地がある。その各台地上は西側の台地からNo. 1 ~ No. 3 地区と呼ばれ、うちNo. 1 と No. 2

から該期の遺物が出土している。

・なすな原遺跡No.1地区

D類。標高52mの台地上に立地する。台地の西脇を小川が流れる。比高差は10m。また北に300mのところ
に恩田川がある。出土遺物は、細隆線文土器が8個体、尖頭器7点、有茎尖頭器1点、打製石斧2点、礫器
2点、細石刃1点、剥片20点である。台地の先端部に向かって、土器の出土はまとまっており、尖頭器は、
台地の付け根側に出土する。礫器と打製石斧がセットで出土している。

・なすな原遺跡No.2地区

D類。標高51mの台地に立地する。台地の東斜面のL.M地点と、台地中央のB.C地点に分布がわかれる。
尖頭器の形態、有茎尖頭器の組成率などから、B.C地点は、L.M地点よりも古い時期のものであることが
わかる。第1地区と同じく北側の恩田川との比高差は10mである。土器3個体、尖頭器類9、剥片類270、加
工具類6である。L.M地点もB.C地点も剥片主体の組成である。両地点共に石器集中地点内での明確な場
の分離は見られず、剥片剥離がおこなわれたことがわかる。また、L.M地点では、石器集中の東側から土器
の出土がみられる。

2. 谷本川流域

④⑨ 月出松遺跡（図5）

D類。横浜市緑区加賀原1-8～18に所在する。谷本川東岸の高位台地から南にのびるやせ尾根の頂部から
南西斜面にかけて遺物が分布している。標高59m。出土遺物は微隆起線文土器3個体(59片)、安山岩製の石
鏃1点である。土器は「斜面に沿って細長く広がり、斜面上方から投棄したかのよう」（坂本1996）な分布を
みせている。遺跡の組成は、能見堂遺跡と対照的に、土器主体の組成である。尾根状の台地の斜面に向かっ
て土器が分布している。この状況は、No.21げんじ山遺跡の立地状況と、きわめて類似している。

④⑧ 花見山遺跡（図6）

D類。横浜市都筑区見花山15-35に所在する。標高53mの低位台地に立地し、大熊川谷との比高差は約5～10
m、谷本川、大熊川、早淵川の接点である。

竪穴状遺構を1つ持ち、配石は3基見られる。土器を123個体出土し、剥片類を994点出土している。搔器、
母指状搔器の出土が多いのも特徴である。1号住居跡は母指状搔器と尖頭器と剥片類がめだつ。また1号住
居出土の尖頭器は、未製品と思われるものが多い。また1号住居跡との境界が引きづらい3号配石でも剥片
類が主体的に入る。遺跡全体の分布を見ても、1号住居跡周辺には、有茎尖頭器と石鏃という、明確な分離
が見られる。土器の型式でみても、この遺構の間には一段階の差が見られる。しかし、両時期間で、遺物量
の差はあれど、各グループの遺物をまんべんなく出土している点は共通していよう。

④⑦ 能見堂遺跡（図7）

D類。横浜市都筑区加賀原2-12～18に所在する。谷本川流域。低位台地の中央南側の標高39m地点に立地
する。遺物は、尖頭器13点、有茎尖頭器6点、石鏃2点、スクレイパー4点、打製石斧1点、石核1点、剥
片2,000点以上、微隆起線文土器2～3個体(20片)で、7ブロック4地点に分布している。うち一つのブロ
ックには礫群が見られる。剥片主体の組成である。

3. 鶴見川流域の遺跡立地の傾向（表3・図13）

尖頭器類のみの単発的出土の場合は、丘陵頂部あるいは丘陵斜面に立地することが多く、周辺の同類の遺

No.	遺跡名	河川	類	土器	尖頭器	有茎尖	石鏃	他	小計	剥片	打剥	RF	UF	石核	他	小計	石斧	削器	搔器	ノコ	石錐	機器	他	小計	立地	標高	比高
1	東耕地	矢上川	A			1			1																台地	46	20
2	子母口貝塚	矢上川	A			1			1																台地縁辺	26	15
3	山田大塚	有馬川	A			1			1																台地斜面	26	15
4	西耕地	有馬川	A			1			1																台地縁辺	34	20
5	十三菩提	矢上川	A			1			1																台地上	48	27
6	百崩	早淵川	A			1			1																台地斜面	61	29
7	西ノ谷貝塚	早淵川	A			4			4																高位台地 (丘陵)	42	-
8	七ツ塚	早淵川	A			1			1																台地頂部	44	25
9	東方T3	大熊川	A			1			1																台地斜面	35	10
10	石原	大熊川	A			2			2																舌状台地縁辺	45	15
11	三の丸	大熊川	A			1			1																台地	50	10
12	川端向	谷本川	A			1			1																低位台地 (丘陵)	17	2
13	げんか山	谷本川	A			1			1																丘陵斜面	60	20
14	宮ノ前	岩川	D	4		1	4	2	7	87						87								1	緩斜面	51	11
15	宮ノ前南	岩川	D	2		1	1	1	3	少						少	3							3	丘陵斜面	51	11
16	玄海田	恩田川	A			1			1																広い丘陵上	55	11
17	玄海田南	恩田川	A			1			1																丘陵斜面	50	6
18	霧ヶ丘1	恩田川	A			1			1																丘陵先端	45	10
19	霧ヶ丘3	恩田川	A			1			1																丘陵平坦面	50	15
20	西原	恩田川	A			1			1																丘陵頂～緩斜面	91	26
21	げんじ山	恩田川	C2			2			2																丘陵斜面	60	-
22	受地だい山	奈良川	A			3	2		5																丘陵斜面	40	10
23	三矢田	真光寺	A			7	2		9																丘陵斜面	90	35
24	日影山	真光寺	A			3	3		6																尾根斜面	83	27
25	大久保	真光寺	A			2	2		4																尾根斜面	76	15
26	山王坂	真光寺	A			1			1																尾根斜面	70	15
27	藤の台	恩田川	A			2			2																丘陵斜面	103	26
28	川島谷10	鶴見川	C1	1																					丘陵斜面	80	10
29	川島谷3	鶴見川	A			1			1																丘陵斜面	80	10
30	川島谷9	鶴見川	A			1			1																丘陵斜面	80	10
31	川島谷13	鶴見川	A			1			1																丘陵斜面	79	9
32	金井原1	木倉川	A			1			1																丘陵斜面	80	20
33	金井原2	木倉川	A			1			1																丘陵斜面	80	20
34	金井原6	木倉川	A			1			1																丘陵斜面	80	20
35	戸場	木倉川	A			1			1																丘陵上平坦部	69	20
36	岡上丸山	木倉川	A			1			1																台地下	50	21
37	小山田10	鶴見川	A			2			2																丘陵斜面	120	15
38	小山田12	鶴見川	A			1			1																丘陵斜面	110	13
39	小山田13	鶴見川	E														1							1	丘陵斜面	118	13
40	小山田15	鶴見川	A			3			3																丘陵斜面	115	15
41	小山田27	鶴見川	A			1			1																丘陵斜面	125	-
42	梁田寺南	鶴見川	A			2			2																台地平坦部	102	25
43	利倉貝塚	鶴見川	B1			1			1								1							1	台地先端	48	40
44	大丸	菅田川	A			1			1																丘陵斜面	55	10

表3(1) 鶴見川流域の草創期遺跡分類

No.	遺跡名	河川	類	土器	尖頭器	有茎尖	石鏃	他	小計	剥片	打剥	RF	UF	石核	他	小計	石斧	削器	搔器	ノコ	石錐	礫器	他	小計	立地	標高	比高		
45	三枚町	鳥山川	A			1			1																低位段丘陵	25	15		
46	なすな原2B	恩田川	D	3	2	6	1	9	263	1	5			1		270			2	1			3	6	台地斜面	47	17		
46	なすな原1	恩田川	D	8	7	1		9	20							20							2	4	台地	52	10		
46	なすな原2L	恩田川	D		28			28	254	3	8	4		1		270			1					1	台地平坦部	51	21		
47	能見堂	谷本川	D	3	13	6	2	21	多					1	多	994	8	43	106	31	16	15	15	5	低位台地(丘陵)	39	19		
48	花見山	谷本川	D	123	33	54	19	2	108	988				6										234	低位台地縁辺	53	5		
49	月出松	谷本川	D	3												少									尾根斜面頂部	59	20		
50	南大谷稲荷山	恩田川	B2		3	1		4	少							1									丘陵斜面	49	-		
51	向原	大熊川	B2		3			3							1										丘陵斜面	110	30		
52	げそう谷	小野路	A																						台地	-	-		
53	大熊仲町	大熊川	A			1		1																	緩斜面	32	-		
54	日吉団地	矢上川	A																						丘陵	58	-		
55	神木	矢上川	A			1		1																	台地	42	-		
56	井田伊勢台	矢上川	A			1		1																					
57	地藏堂A	恩田川	A		2			2																					
58	成瀬西1	恩田川	A			1		1																					
59	成瀬西2	恩田川	A			3		4																					
60	旧城寺	恩田川	A			1		1																					
61	F2	早淵川	A																										
62	親福寺北	早淵川	A		1			1																					
63	八幡山	早淵川	A		1			1																					
64	旧長沢宅	早淵川	A		1			1																					
65	大塚	早淵川	E		1			1									1							1					
66	二ノ丸	大熊川	A		1			1																					
67	朝光寺原東	谷本川	E														1												
68	下田小	矢上川	A		1			1																					
69	中組	矢上川	A		1			1																					
70	高田貝塚	矢上川	A		1			1																					
71	亀井	矢上川	B2		1			1						1															
72	八幡平		A		1			1																					
73	金井15号		A		1			1																					
74	三輪南A8		A		1			1																					
75	今井谷戸		A		1			1																					
76	前の原		A		1			1																					
77	鶴居上の原		A		1			1																					
78	三輪南A3		A			1		1																					
79	七国山		A			1		1																					
80	金井		A			1		1																					
81	岡上		A			1		1																					

表3(2) 鶴見川流域の草創期遺跡分類

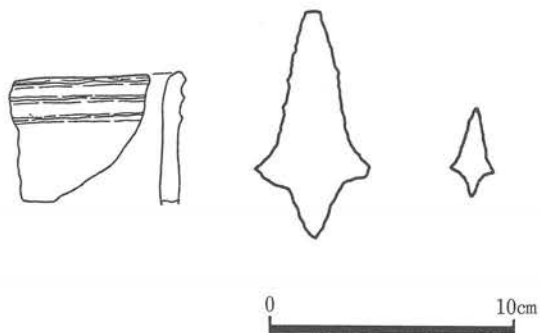
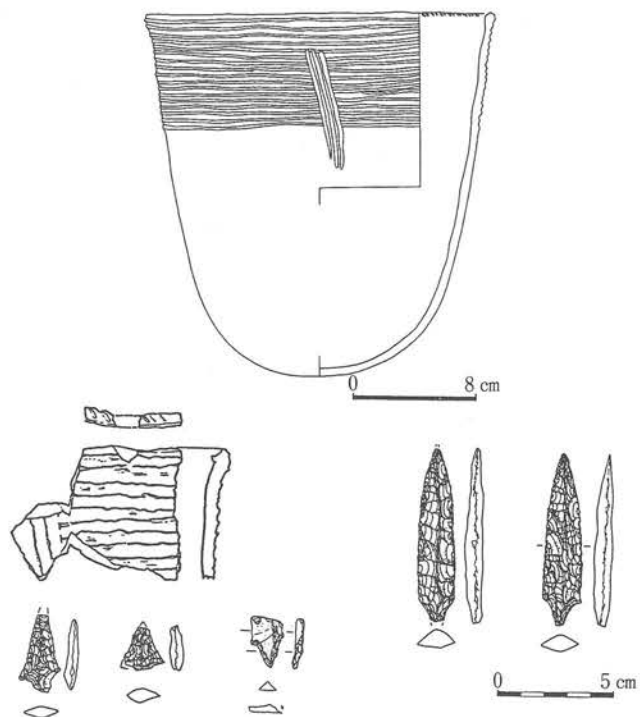


図2 げんじ山遺跡の立地と出土遺物



長津田遺跡群の立地 (1/25,000)
(①・①宮之前・②・②宮之前南)



宮之前遺跡出土遺物



宮之前南遺跡出土遺物

図3 宮之前・宮之前南遺跡の立地と出土遺物

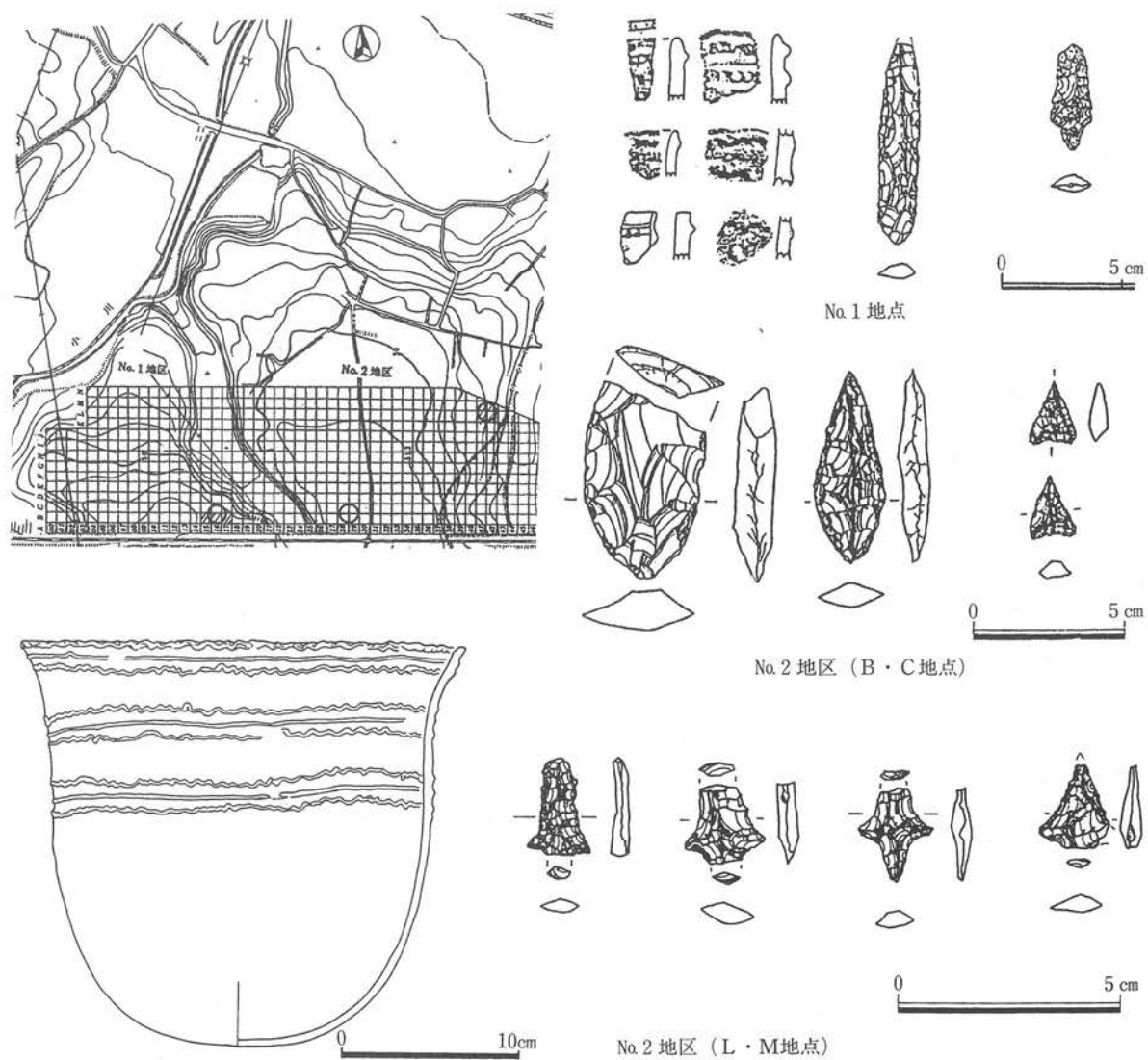


図4 なすな原遺跡の立地と出土遺物

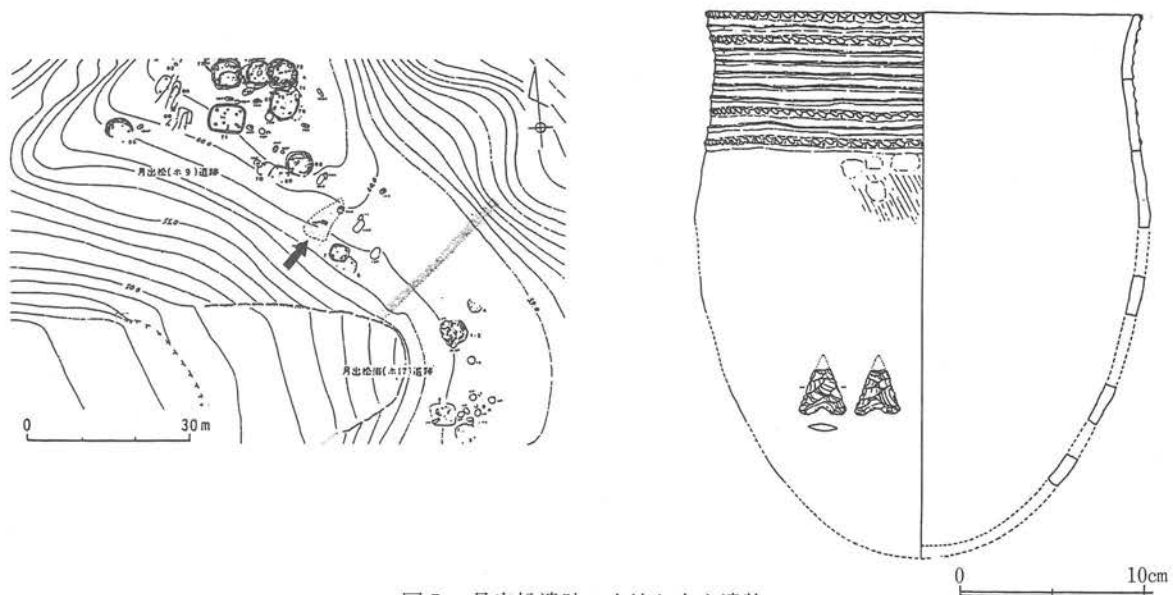


図5 月出松遺跡の立地と出土遺物

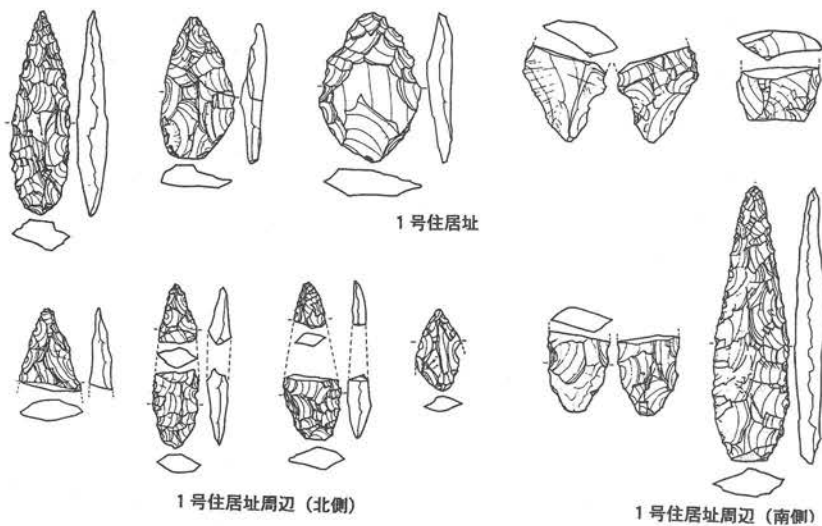
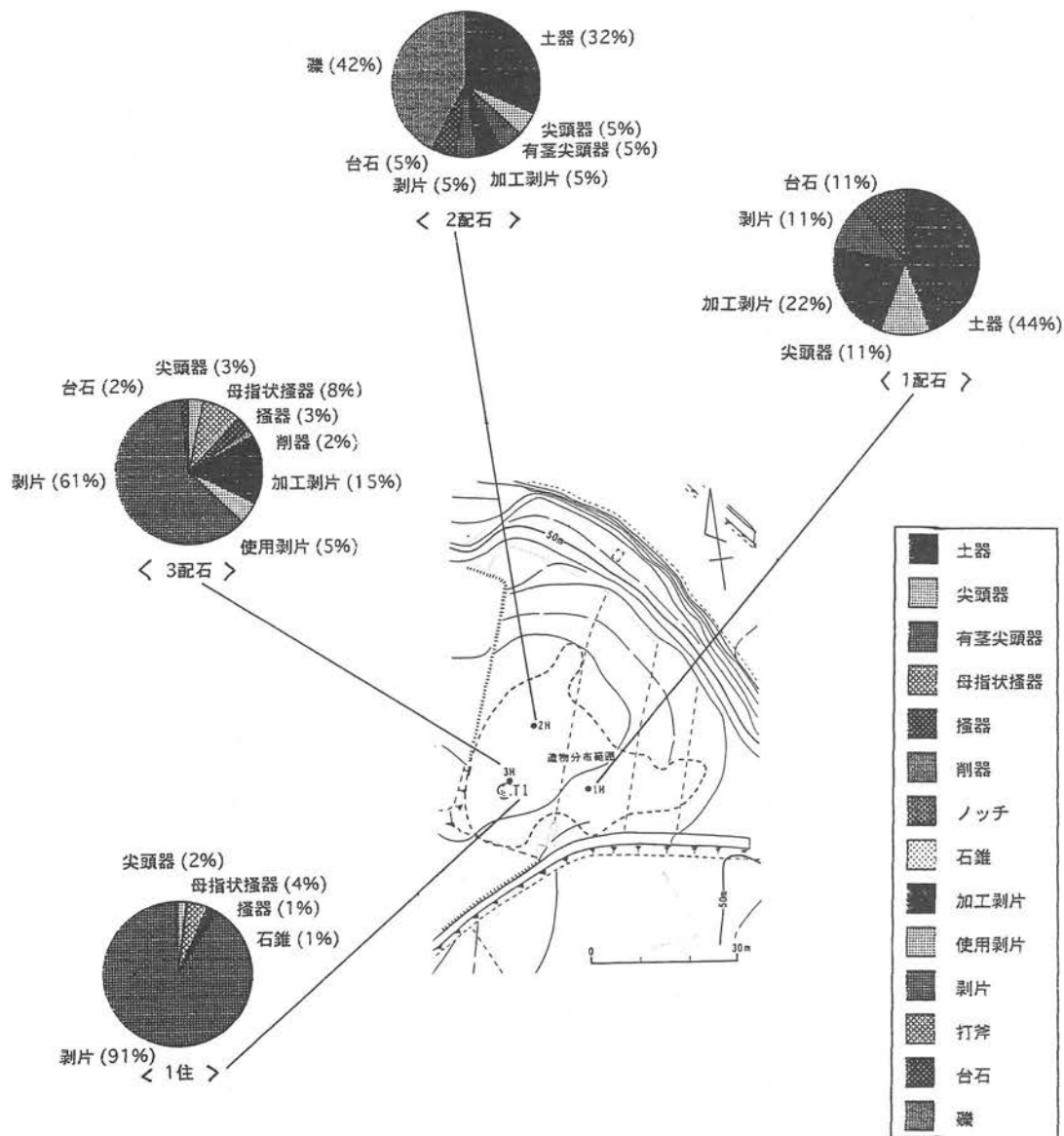


図6 花見山遺跡の立地と出土遺物

0 5 cm

跡との距離の制約などはみられなかった。

C類、D類に注目すると、谷本川流域と恩田川流域において、近隣の遺跡同士で、出土遺物組成がきわめて相互補完的な関係の遺跡が存在し、その中間には、4つの遺物グループをわりあいまんべんなく出土している遺跡が存在する。

これについては、能見堂遺跡と月出松遺跡の遺物組成の補完性が、以前から指摘されている（坂本前掲、小宮1990）。しかし、それと同様の傾向が、鶴見川をはさんだ恩田川でも見うけられた。土器を出土する遺跡が比較的密集している谷本川流域（花見山・能見堂・月出松遺跡）と、鶴見川を挟んだ西側の恩田川流域（宮の前・なすな原・げんじ山遺跡）においては、土器を主体とする月出松遺跡とげんじ山遺跡、剥片類を主体とする能見堂遺跡となすな原遺跡第2地区が、地域ごとに見るとそれぞれ相互補完的な値を見せている。そしてさらに、両地区に、花見山遺跡と宮の前遺跡というまんべん無い組成の、酷似したグラフの表示をする遺跡が存在する。

この三者の関係は、さらに、遺跡の標高の関係にもあらわれている（表1・図13）。土器主体の遺跡は、地域内の三者の中で、もっとも高い標高を示し、剥片主体の遺跡は、もっとも低い値を示している。そして、その中間にまんべんない組成の遺跡の標高が入るのである。

遺跡内部で場の分離は、花見山遺跡でわずかにみられたのみである。その花見山遺跡もD類の遺跡であり、母指状搔器・尖頭器の分布が1号住居周辺に偏ることの他には、著しい組成差があまり見られない。同様に、他の遺跡も各グループの遺物を少しづつであれ出土していることから、遺跡自体の性格が、単独の専門的な性格（石器製作のみ、など）ではないことがうかがわれ、場の分離も著しくない。

C1類の月出松遺跡とげんじ山遺跡は、尾根状の台地斜面にむかって土器が分布しており、共通したあり方である。

IV. 多摩川流域の分析（表4・図1）

多摩川流域には計19の遺跡がある。多摩ニュータウン遺跡群という広大な遺跡群が存在するが、ここではその中から、土器の出土した遺跡であるNo.116、No.125、No.426、No.796について、分析していく。多摩川の支流は、五反田川・平瀬川・三沢川・大栗川・乞田川である。

まず、地域的な視点で遺跡の組成分類・分析をおこなう。

1. 三沢川流域

③ 栗木IV遺跡（図8）

C2類。川崎市多摩区黒川390に所在する。標高120～130mの山から張り出した北向きの緩斜面に立地する。遺跡から北に200mに三沢川が流れる。標高105m、三沢川との比高差は30m。出土遺物は砂質泥岩製の尖頭器1点、微隆起線文土器2片である。

② 駒沢学園校地内遺跡（図9）

C3類。稲城市坂浜3-228に所在する。標高100mの台地縁辺部に立地する。三沢川との比高差は15m。出土遺物は土器1点、尖頭器1点、有茎尖頭器2点、搔器1点である。

④ 黒川東遺跡（図10）

C3類。川崎市多摩区黒川527に所在する。舌状台地に立地し、三沢川との比高差は20m。土器を2個体、尖頭器2点、有茎尖頭器1点、石斧1点、石錐1点が点出土している。

2. 大栗川流域

⑫ 多摩ニュータウン遺跡No.125遺跡 (図11)

C 2 類。標高91mの本遺跡は合流点近くの段丘に立地する。大栗川からの比高差は1m。土器4片、尖頭器2点、有茎尖頭器1点を出土している。

⑩ 多摩ニュータウン遺跡No.116遺跡 (図12)

C 4 類。大栗川流域の段丘緩斜面下部に立地し、標高105m、比高差は5m。土器23片、剥片類が多量に出土、加工具は15点出土している。遺跡内の遺物分布は、石斧主体の場合と礫器・加工礫・矢柄研磨器主体の場合やや分離した形を取っている。

⑪ 多摩ニュータウン遺跡No.426遺跡 (図12)

D 類。標高85mの台地先端部に立地し、大栗川との比高差10m。土器108片、尖頭器21点、有茎尖頭器1点、剥片1150点、石核8点、石斧6点の出土である。遺跡内の分布は、礫の分布が2箇所集中していて、その空白部分には有茎尖頭器の分布が重なる。

⑬ 多摩ニュータウン遺跡No.796遺跡 (図11)

D 類。剥片を2,000点出土する本遺跡では、神子柴型石斧4点、尖頭器13点、土器60片を出土している。低位段丘の標高90mに立地。比高差は1m。

3. 多摩川流域の遺跡立地傾向 (図14)

各遺跡の組成分類から把握された地域の特徴をまとめてみる。土器を出土している遺跡に注目し、各遺跡を組成ごとに分類、グラフ化して表した (図14)。

黒川地区では、C 2 類の栗木IV遺跡のグラフは、土器主体の右むきの三角形である。そしてC 3 類の黒川東遺跡と駒沢学園遺跡のグラフは、上と左右に広がる三角形である。

ここで、各分類別に遺跡の標高と比高差を比べてみると、C 2 類の栗木・遺跡は標高が105m、比高差は30mである。つぎに、C 4 類の黒川東遺跡は標高98m、比高差20m、駒沢学園遺跡は標高100m、比高差20mである。前節で見られた鶴見川の遺跡立地の傾向が、ここでも見られる。つまり、近隣のいくつかの遺跡では、C 2 類の遺跡は標高が高いほうに、剥片主体の遺跡は標高の低いほうに立地し、中間にまんべんない組成の遺跡が存在するのである。

また、多摩ニュータウン遺跡では、C 2 類のNo.125は右向きの三角形、題する剥片主体のNo.116遺跡は、具体的な数量は不明だが、明らかにNo.125の三角形と、対照的な形状の三角形になるであろう。そして、その周辺には、ここでもNo.426、No.796遺跡が存在する。遺跡間の距離を見ると、補完的な組成の125遺跡と116遺跡、共通の組成の426遺跡と796遺跡がそれぞれ近い距離にある。また、426遺跡と796遺跡は支流の合流点に位置している。しかしこちらのほうは、鶴見川流域で見られたほどの完全な比高差の違いは見られない。

V. 帷子川流域の分析

帷子川流域には7遺跡があるが、いずれもA類であった (表5)。

この地域は、遺跡数・出土遺物点数共に少なく、遺跡内部の分析が可能な遺跡や土器を出土する遺跡もないことから、前述の様な立地の傾向を見ることはできなかった。

しかし、入江川流域である⑥大口台遺跡をのぞいては、標高約70～80m台で河川との比高差が20m台と、平均した立地傾向を示している。

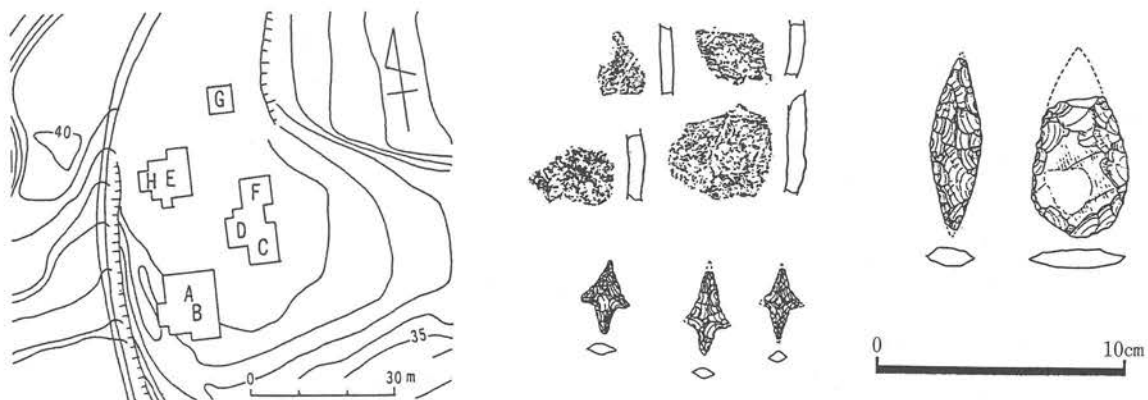


図7 能見堂遺跡の立地と出土遺物

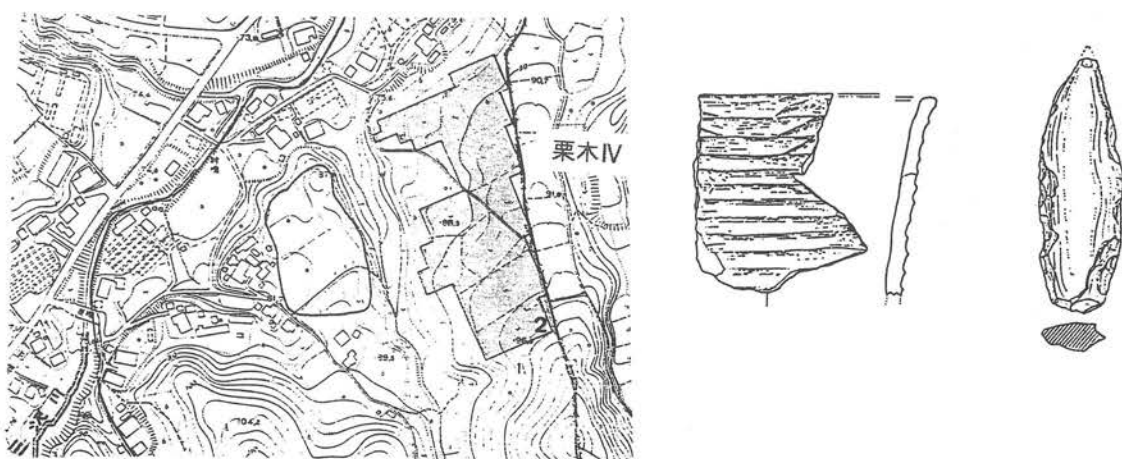


図8 栗木IV遺跡の立地と出土遺物

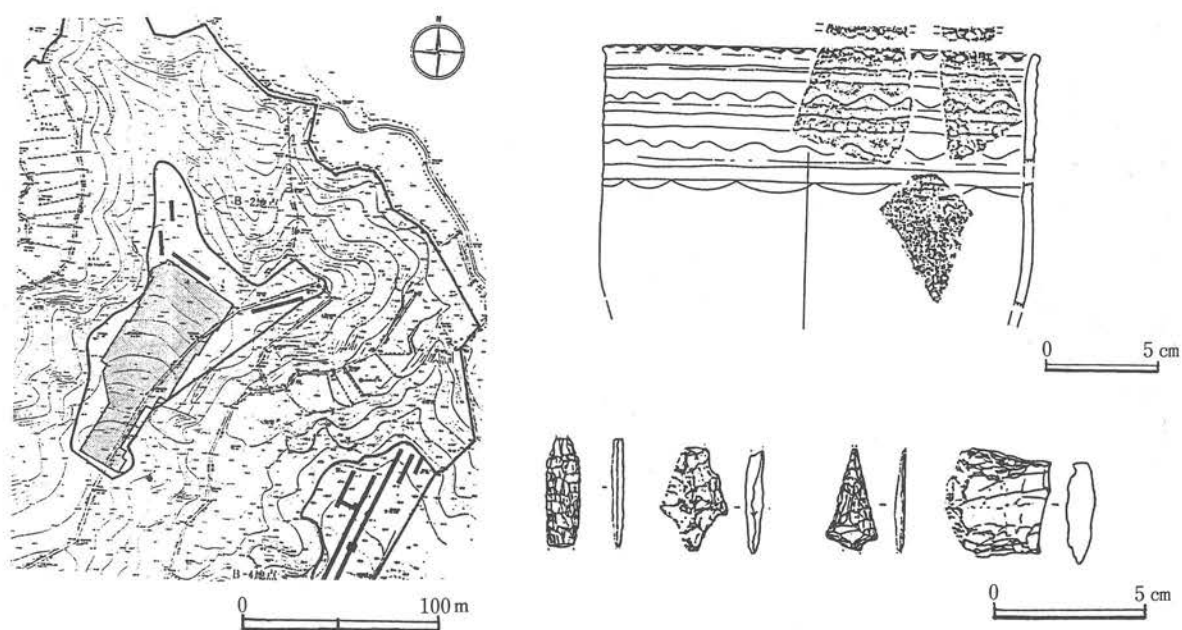


図9 駒沢学園遺跡の立地と出土遺物

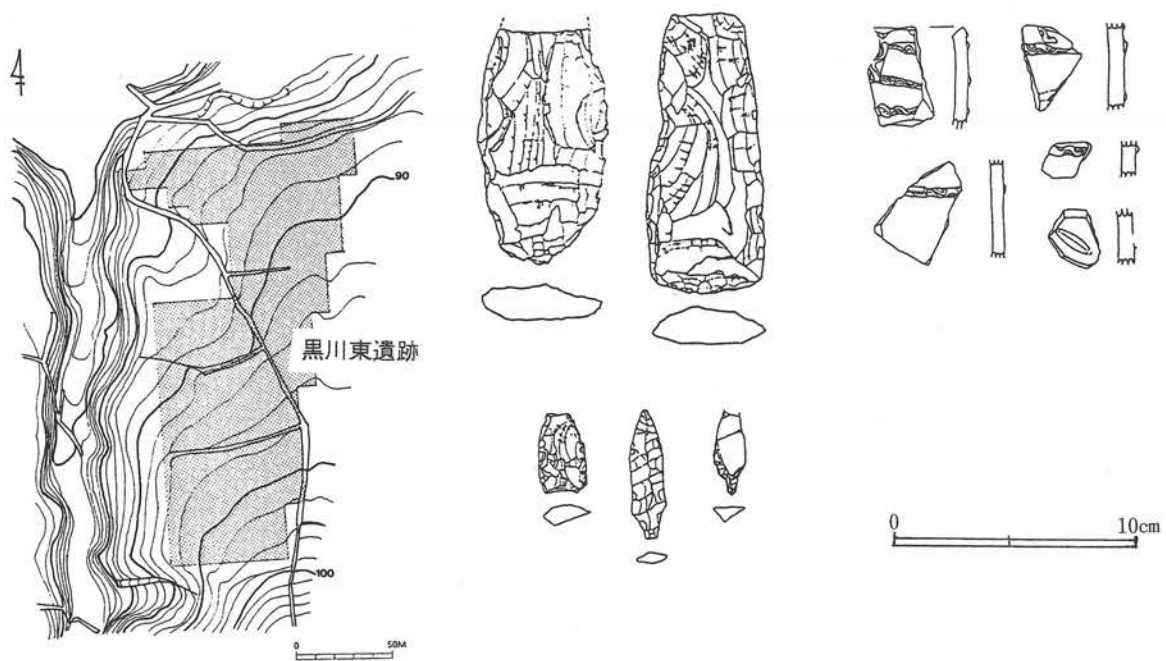
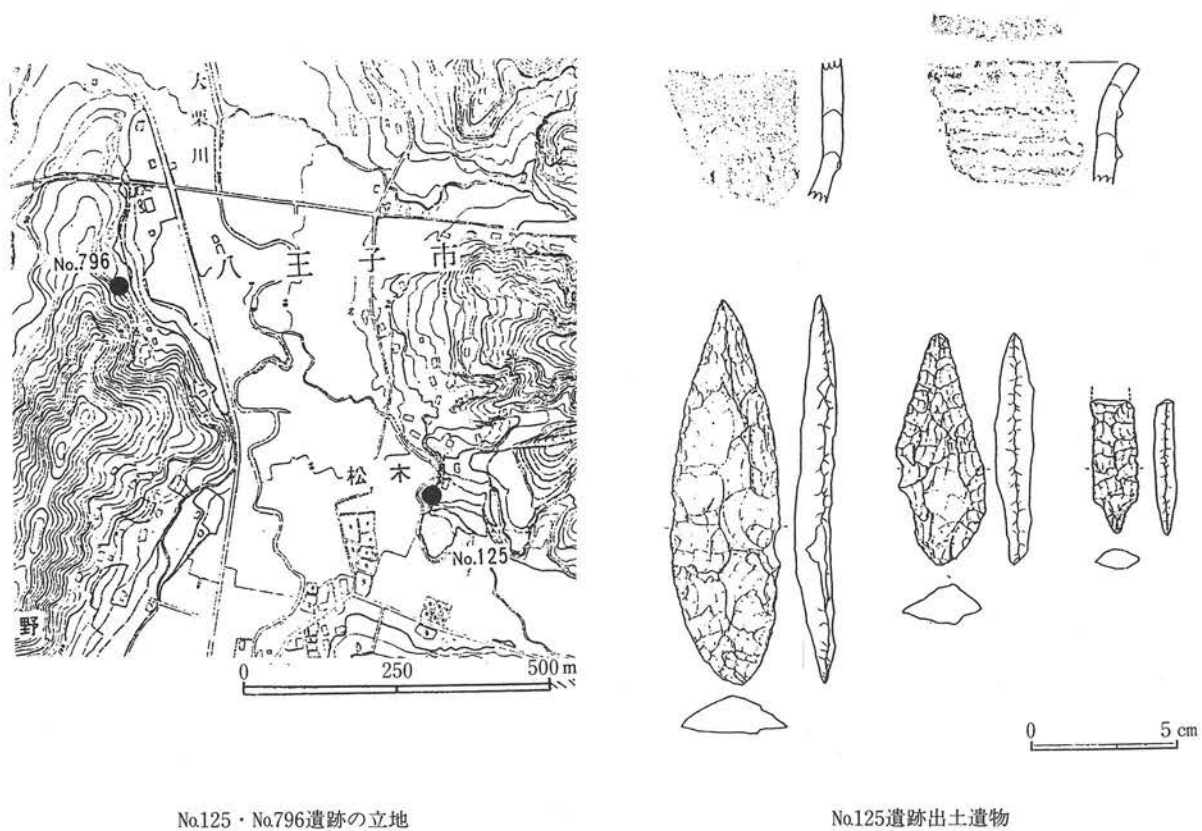


図10 黒川東遺跡の立地と出土遺物



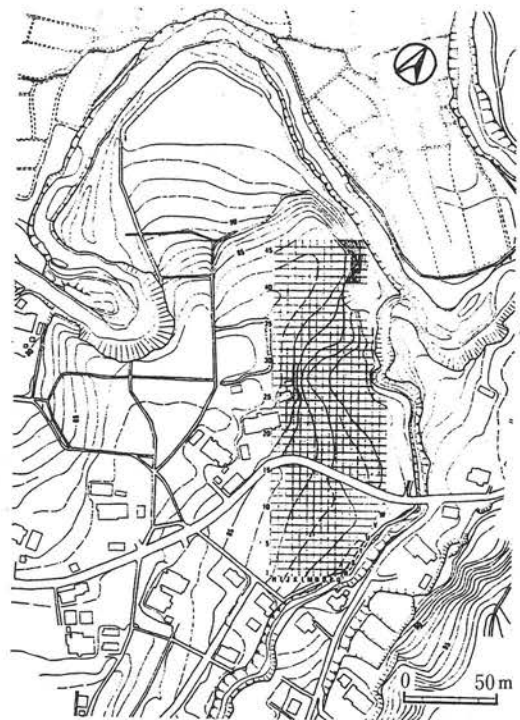
No.125・No.796遺跡の立地

No.125遺跡出土遺物

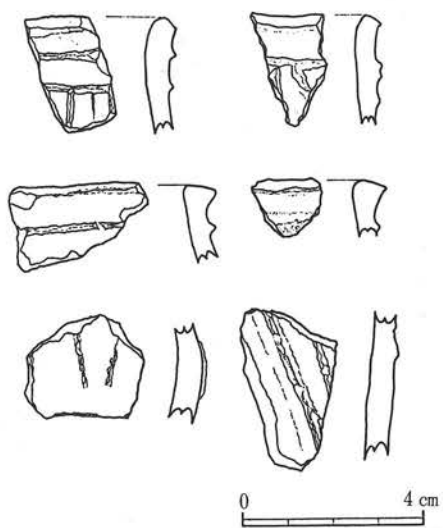
図11 多摩ニュータウンNo.125・No.796遺跡



No.116遺跡の立地



No.426遺跡の立地



No.116遺跡出土遺物

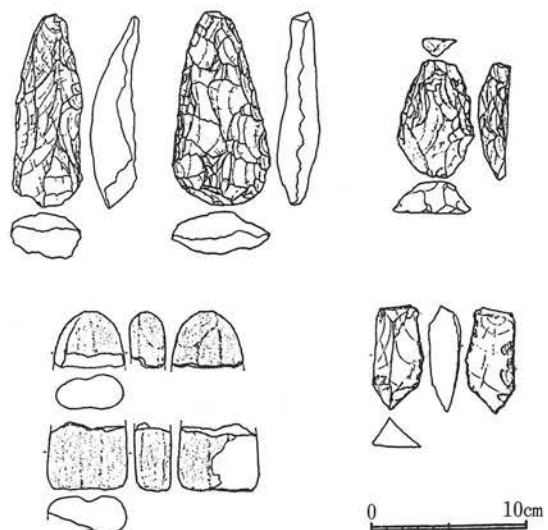


図12 多摩ニュータウンNo.116・No.426遺跡

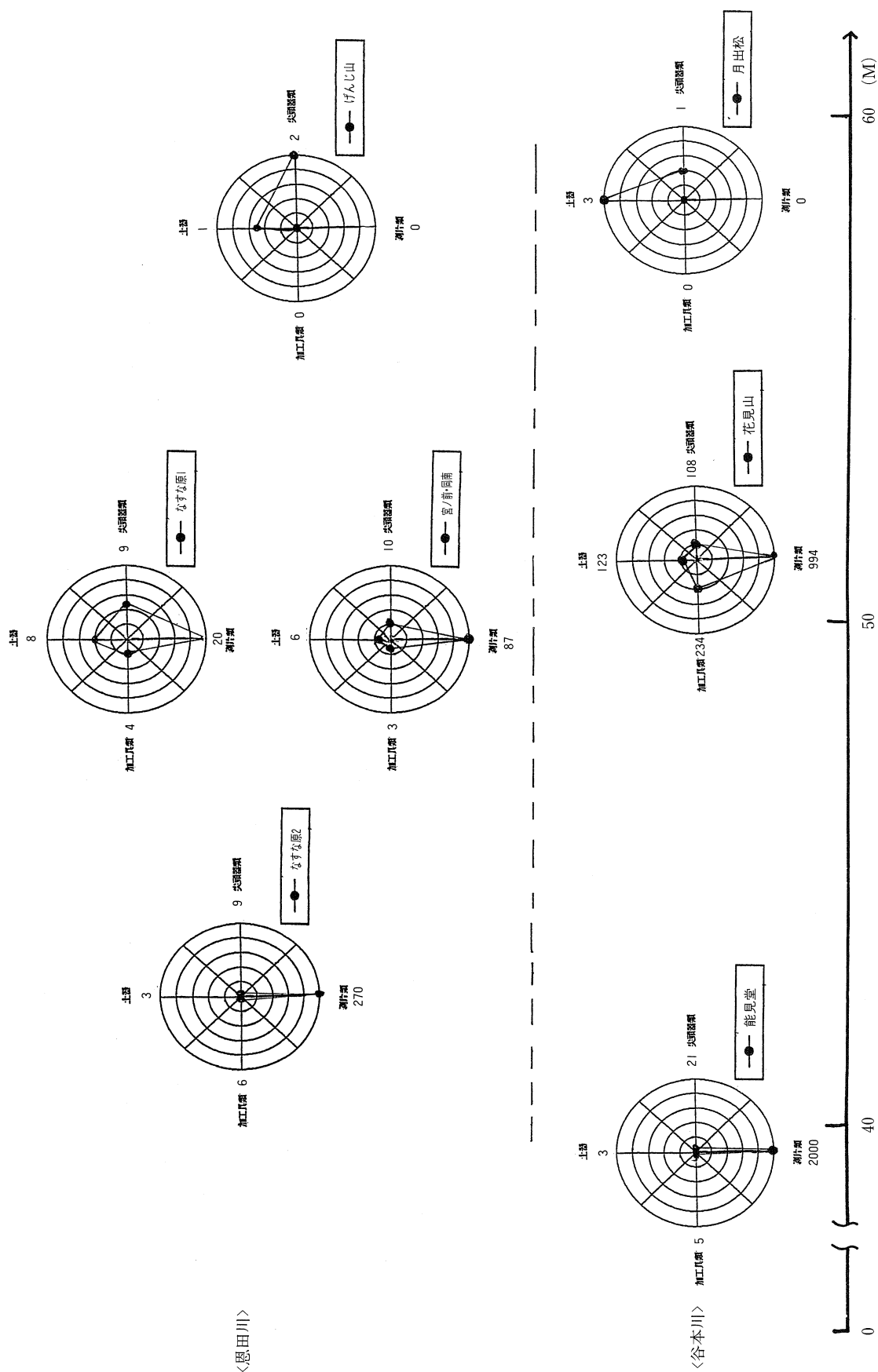
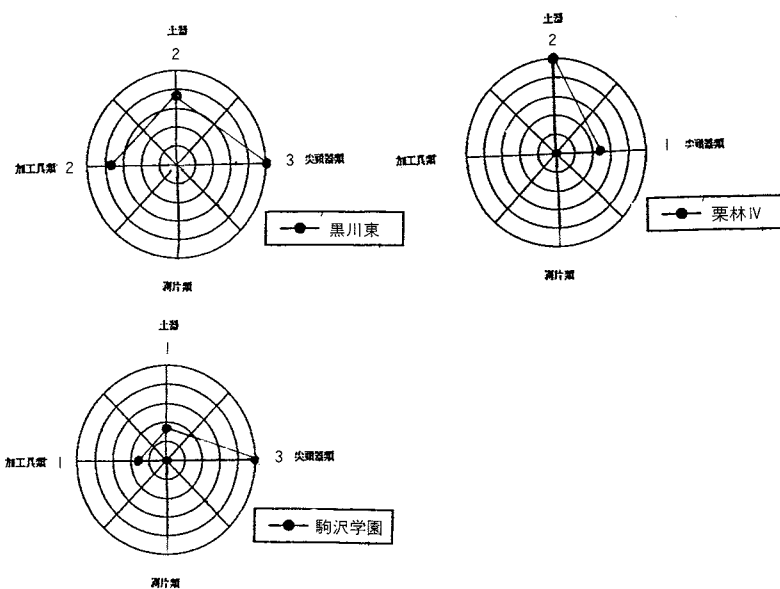


図13 鶴見川流域の遺跡立地

〈三沢川〉



〈大栗川〉

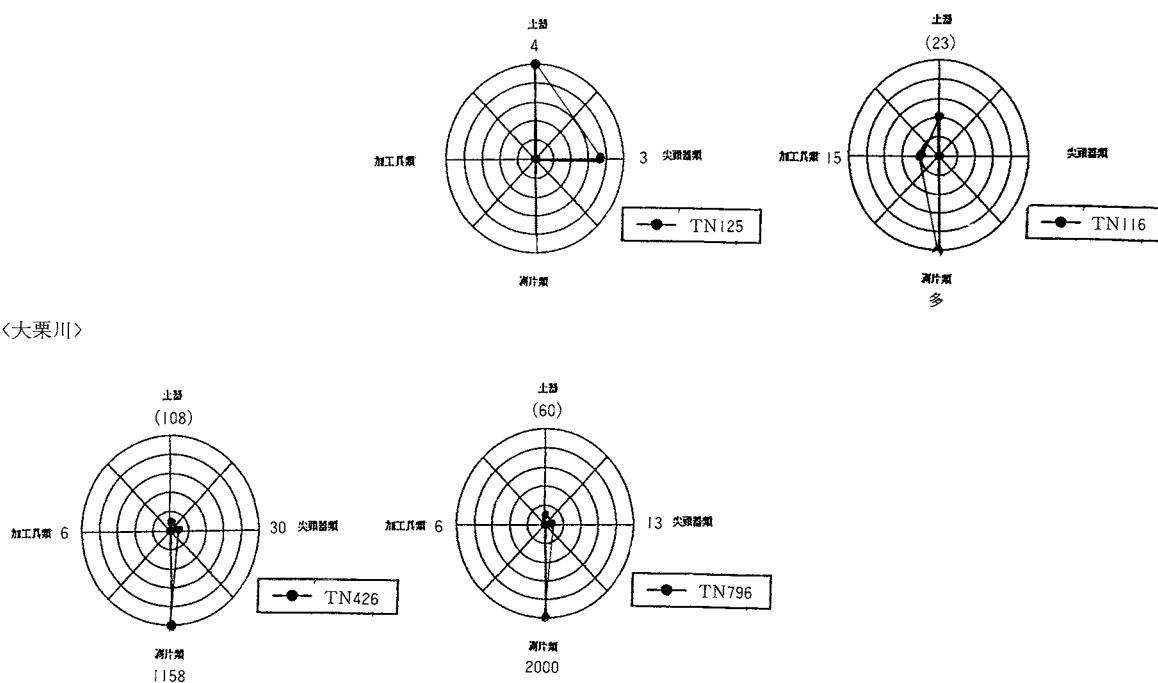


図14 多摩川流域の遺跡立地

VI. 縄文時代草創期の遺跡における領域

多摩丘陵において、土器を組成にもつ遺跡がいくつか集まるとき、土器主体で尖頭器類をもつ遺跡（C 2 類）は、その対照となる剥片主体でわずかな加工具をもつ遺跡（C 4 類）よりも、標高の高い位置に立地することがわかった。そこには組成の補完と共に立地空間のちがいが、つまり標高の差があわられている。また、その二者の間には、必ずまんべんない組成をもつ遺跡（D 類）が存在する。

この法則性は、鶴見川の流域の 2 支流でそれぞれみられ、さらに、多摩川の流域においてもほぼ同じ法則が機能していたことがわかった。そして、帷子川流域における分析からは、土器の入らない組成の場合と、河川を軸にした関連が希薄である場合は、その法則が見られないということがわかった。

つまりこの多摩丘陵において、遺跡は支流ごとに 3 遺跡ほど集まっており、まんべんない組成の遺跡、いわゆる居住地を中心に、それよりも標高の低い場所に石器製作の性格の強い遺跡が、標高の高い場所に狩場の性格の強い遺跡が立地し、相互に組成が補完している。

この各遺跡の遺物組成の補完と、遺跡立地を空間的に見た場合の標高の高低は、河川ごとに近隣の 3 遺跡がこうした立地傾向を出しており、河川と関連した傾向であることが考えられよう。

こうした傾向は、甲信地区でもみうけられるものである。

以前行った長野県佐久市下茂内遺跡、同岡谷市中島 B 遺跡、山梨県明野村神取遺跡などの分析では、剥片を多量に組成する尖頭器製作址が、河川との比高の差がない場所に立地する傾向があった（秋山1996）。遺跡は河川を意識して立地したと思われる。そしてやはり剥片主体で、遺跡の性格がより石器製作址に偏った遺跡が、標高の低い方つまり河川寄りに立地している。これは当時の社会において、活動の目的ごとに、行う場所が分化し始めていたことの表れだといえよう。また、当時在地産の石材を積極的に利用していたということもうかがえる。

以上のことから、この時期は、各地域で共通の大枠「在地産石材の利用・活動の場の分化・生業の分化による遺跡の標高的重層性」が存在したということが言えるだろう。

「定住化」のなかでの領域

縄文時代の定住化を早期から発達するとしてきた先行研究は、その多くの分析項目が竪穴式住居・炉などの表層的なものであった。しかし、そうした遺構がわずかに、多様な形で発見されてきた草創期前半には、実は当時の人々の選地の傾向が、はやくも旧石器時代とは異なったものになっており、定住化が深層の部分ではすでに確固たるものであったことがわかる。そのポイントとなったのは「分化」であろう。場が機能ごとに分化し、そこでの活動（生業）が分化する。そして在地の石材の利用でそれまでの広域の石材流通網から地域ごとに分化する。こうした変化が草創期前半の領域を作り出していると言えよう。そしてこの領域のありかたを当時の人々が安定して保持していたことが、草創期前半における尖頭器類の大量産出、安定した土器生産などを可能にしたのであろう。

おわりに

定住化という言葉の陰には、当時の社会全体の大きな変化が影響していることは間違いない。該期の遺物・遺構の分析に加えて遺跡立地を分析することで、草創期前半には、居住地の選択について大きな特徴があったことがわかった。今後、あらたに遺跡内部における場の分化のあり方を分析することで、当時の人々の領

域の構造が明らかになると思われる。また、今回分析した遺跡のほとんどが在地産の石材を主体とする石器群の遺跡であったため、遠隔地からの石器入手の流れのなかでの分析もおこなう必要があろう。そして土器・石器群の変化との関連性も課題としていきたい。

最後になりましたが、本研究をおこなうに当たり、ご指導を頂きました多くの方々に感謝申し上げますと共に、お礼を申し上げます。

参考文献

- 栗島義明 1988 「御子柴文化をめぐる諸問題」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』 4
1995 「日本列島における移行期の文化」『東アジア・極東の土器の起源』
- 坂本 彰 1997 「個の器」『利根川』 18
- 桜井準也 1993 「縄文時代草創期前半の有舌尖頭器の平面分布について」
『慶応大学湘南キャンパス内遺跡』 1
1993 「縄文時代における遺物の空間分析と考古学的地域について」
『民族考古』 1
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』 29
- 白石浩之 1993 「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群D区で検出された埋納遺構」
『考古学研究』 42
- 白石浩之他 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川県考古学の諸問題』
- 諏訪間順 1996 「かながわにおける有舌尖頭器及び石鏃の出現時期について」
『かながわの縄文文化の起源を探る』